



する者とをしずめるためでした。」(下線付加) をご自身に適用されて『幼子たちの叫びは敵を静めるため神が用意された賛歌である』と答えられたことは、ますます彼らの敵愾心(てきがいしん)をあおり、イエス逮捕への動機を不動のものにしたに違いなかったのです。

そのような状況下で語られたこのたとえには、二人の息子とぶどう園の主が登場します。マタイの福音書には『主のぶどう園』に関する三つのたとえが記されていますが、いずれも『主人』に象徴されているのは父なる神で、働き人たちは神の国の収穫を父に納めます。この《二人の息子のたとえ》では、イエスご自身の解説により、最初(い)と答えながら結果的には父の御旨を行なった最初の息子に象徴されているのが、意外にも、実は罪を悔い改めた取税人や遊女たちで、彼らは父なる神に受け入れられ、反対に、父に頼まれたとき肯定的に答え、その場をつくろいながら、言ったことを実行しなかったもう一人の息子の方が、すでに救われたと信じていた宗教家たちの実態であることが指摘されたのでした。不従順、不忠実を理由に父なる神が認められなかったのは、皮肉なことに、宗教家たちが滅びに至る者として卑下していた当時のいわゆる「罪人たち」ではなく、祭司長、民の長老、律法学者、パリサイ人、サドカイ人ら、イエスを受け入れなかった自分たち宗教家だったのです。彼らは「義の道」を告げ知らせた洗礼者ヨハネを受け入れなかったばかりか、メシヤ(救い主) 到来の信仰へと導く、悔い改めのバプテスマをも受け入れなかったのでした。なお悪いことに彼らは、悔い改めて神の国の実を結ぶことを迫ったヨハネのミニストリーに答え、多くの罪人たちがキリストの福音を受け入れ、変えられたのを目にしなが、それでも心を頑なに、悔い改めるどころかキリストを拒み、神の国のメッセージを受け入れなかったのです。このたとえのポイントは神の御旨を行なうことの重要性です。「彼ら(律法学者、パリサイ人)があなた方に言うことはみな、行ない、守りなさい。けれども、彼らの行ないをまねてはいけません。彼らは言うことは言うが、実行しないからです。」(マタイ23:3) とイエスが教えられたように、宗教指導者、敬虔な信者、独善的な者たちは御言葉に精通し、父なる神の御旨もよく知り、語りはするのですが、実行しないことが多いのです。むしろ、彼らが父の御旨ではなく、自我を満足させる宗教行為によって信心深く装(よそお)っていることを、イエスは非難されたのでした。

「わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。その(再臨の)日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう、『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』しかし、その時、わたしは彼らにこう宣言します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』」(マタイ7:21-23、下線付加) とイエスが警告されたのは、見せ掛けの独善の実で

人々を欺(にせ)いていた偽預言者や「聞いても実行しない人」に対してでした。神の言葉を土台にしたミニストリーではなく、自分の欲望の上に建て上げるミニストリーは、キリスト者が報酬に与る『キリストの裁きの座』で主に認められるどころか、裁きの宣告を受けることになるのです。御言葉の光に照らされ、父の御旨を知りながら、成すべき善を怠ったり、あるいは、口で宣言しながら実行しない口先の安請け合い、約束の無視、不実行のまま物事をうやむやにしてしまう無責任さ等々は、キリスト者の間でも結構見過ごされていますが、律法の禁ずることを行うことが律法を犯し、罪であると大差ないほどに清算しなければならぬ罪なのです。

この成すべきことをしない信仰生活が罪に定められることを諭した教えを、イエスはたとえで多く語られましたが、その一つが冒頭に引用したもう一つのたとえ《タラントのたとえ》です。長旅に出る主人(死んで、甦り地上を離れ、昇天されるキリスト)は、留守の間しもべたちに能力に応じて神の御用のため働くようにと信用貸しで、賜物、必要な物を与え、他方で、委ねられた者には後に主人に申し開きをする責任が課されます。主人が帰ってきたら(キリストの再臨)、清算しなければならぬのです。最初の二人はそれぞれ預かったものを二倍にして主人に報告します。すなわち、二人とも与えられた能力、賜物を最大限に用いて100%の働きをしたのでした。二人は「主人の喜びをともに喜んでくれ」と、おほめの言葉と大きな報酬とを受けます。ところが三人目の者は、主人を「蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひどい方」と恐れ、神から与えられた賜物を隠し、用いることも増やすこともしないで過ごしたのでした。主人は、しもべが忠実であってほしいと願う期待を裏切って、主人のために働くこともせず成長することもなく、不忠実なままに終わったそのしもべを、役に立たない怠け者とみなし、持っていた物まですべてを取り上げ、「外の暗やみ」に追い出したのでした。

イエスがキリスト者に報酬を与えるために戻ってこられる再臨のとき、このたとえのような不忠実なしもべは「主よ、あなたは私の能力を超えてあまりにも多くを期待された厳しい方です。私は真理を憎むこの世では、チャンス、お金、仕事、友、親兄弟等々持っているもの、得たものを失うのが怖かったので、危険を冒してまであなたのために働く勇気がありませんでした」と言って弁解するつもりかもしれませんが、しかし、このしもべの神に対する姿勢が間違っていることを、聖書は次のように語っているのです。「だれでも、イエスを神の御子と告白するなら、神はその人のうちにおられ、その人も神のうちにいます。私たちは、私たちに對する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛のうちにいる者は神のうちにあり、神もその人のうちにおられます。．．愛には恐れがありません。

全(ま)き愛は恐れを締め出します。」(ヨハネ第一4:15-18、下線付加)「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理人として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。．．神が豊かに備えてくださる力によって、それにふさわしく奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。」(ペテロ第一4:

10-11) 「あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。．．．この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」(ローマ人12：1-2)。すなわち、キリストの真のしもべは神の御旨を行なう者なのです。

《二人の息子のたとえ》は、父なる神の御旨を実践することが、神の家族に迎え入れられ神の国に入る重要な要素であることを教え、《タラントのたとえ》は、キリストが昇天されて後再び地上に戻ってこられるまでの『今のとき』を、個々のキリスト者がキリストの忠実なしもべとしてキリストの信用貸しに答え、賜物、能力、お金、物品、人間関係を神のため隣人のため、如何に賢く用いていくかの責任が問われていることを教えています。